
Time

南条 陸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Time

【Zコード】

N4217A

【作者名】

南条 陸

【あらすじ】

彼女が私に「子供が出来たかもしれない」と伝える。産婦人科の病院へ向かう私と彼女。大学生の私は頭の中では妊娠していておろすことを決めていた。しかし、私は彼女が妊娠していようがそうでなかろうが関係ない自分についてさまざま考えをするようになる。まだ、大人になりきれていない私についての青春小説。

まばゆい光に包まれた心地よい朝だった。昨夜の憂鬱を少しでも、和らいでくれる暖かい光だつた。小鳥の声が聞こえるようで現実にはおそらく聞こえてはいなかつた。気持ちが滅入るところなど日常のどうでも良いことにも目を配るとはよほど昨夜の出来事が私にとってショックだつたのだろう。隣には、まだ日の覚めない彼女がまぶたにかすかな光の刺激をつけながら眠つている。

まだ起きるには早かつたが、昨日のことを考えると、とても寝ていられるような気分ではなかつた。今尚、この時点できえも、私は昨日の会話の内容をゆっくりと総括するので精一杯でそれ以上のことは何も思いつかなかつた。いや、正確には思いたくもなかつた。今日一日が、長い一日になることは深く考えなくて予想できた

……。

特に問題のない私たちだが、過ちは突然にして訪れる。いや、過ちと言つよりは必然だつたのかもしれない。これを過ちと解してしまつと全てが否定されてしまつ。それは突然にして起つたことだ。そして、他人事のようで常に身近に存在しているものもあるう。

彼女は昨日、「妊娠したかもしれない」と私に言つた。私はただ、ただ驚くばかりで彼女を活潑するばかりであった。晴天の霹靂とはまさにそのこのようなことで私にはえもいえぬ感覚であつた。同時に、これから自分に迫り来る現実に恐怖した。

『汝、その日もその時間もわからない』と聖書ではいつていたが、本当ににもわからないものだ。私はどんなことにもこれは通用する、と思つた。今日に限つてそんなことを思うのは、自分にとつて

半ば身に覚えのないようなことだからか……。明日は死ぬかもしれない。それは明後日なのかもしれない。それも、聖書が述べるがままである。

恐怖を隠そぐと、私はなぜそつだと言えたのか、手櫛を髪に当てながら質問の一辺倒であった。その一挙一動に彼女は淡々と応えていた。冷静そのもので、言葉には生気がないようでも……。でも、芯が通っていたように思えた。言葉の芯が……。

人はおそらくある程度の覚悟を決めるほどこまでも冷静になれるのかもしない。その彼女の冷静さが、私をぐいぐいと現実へといざなうのであった。

「とにかく、病院へ行つてみようか……」

昨夜、私が思いついた精一杯の言葉であった。

それ以外、以上によけいなことは言えなかつた。ただ、何も言わないことが腹の奥のほうを針で突付く。そんな感じが妙に口元で苦々しかつた。

ただ、現実への第一声がこんなに情けない一言であつたとはなんとも惨めな話であるのかもしれない……。

ちょうど、彼女が目を覚ました。彼女もまだ眠そぐだ。私はベッドから降り、簡単な朝食を作る作業に出た。卵とハムとチーズを火に通し、最後にレタスを加える。これだけでも、バランスは良い。それにフランスパンでも加えれば昼すぎまでは持つだろう。

特に空腹があつたわけではない。ただ、何かをしたくて朝食をつくつた。だから、不必要的食事は喉を通ることはなく、二人とも半

分近く残してしまった。それから着替えて髪を軽く整え出かける準備をした。その間、特に会話はなかつた。せいぜい、「塩を取つて」といったくらいしか記憶にない。それほど、会話は無に等しかつた。こいつ時に笑いをとるようなことを言つと、必ずこけるのがオチだ。何か会話をしようと考えはしてみたが、うかつなことを言つて彼女を傷つけたり怒らせたりするのはこの沈黙よりいやだった。

沈黙は最良の友なのかもしない。ふとそんなことを思った。相手と喧嘩したした際、沈黙を守り続ければ意外とその場は收拾するかもしない。いや、逆に改善するかも。何もいわなければ相手の戦意は失せる。あきれかえるのかもしないが、何を言つても無駄だと悟るかもしない。ひどくはならないなら、沈黙を友として快く受け入れよう。特に今日のような日には。

休日の午後、人ごみの中、駅へと向かう一人は葬式のまえのように暗かつた。ただ、ありつたけの努力、というか思いやりと呼べるのか、足並みを彼女に揃えるのだった。心なしか、彼女の歩調はいつもより少しきスローダウン。気持ちは一人三脚、でも、歯切れは悪い。何もかもがうまくいかないような気分だった。

途中で角にさしかかると、小さな子供を連れた家族を見た。とても幸せそうだった。少しうらやましかつた。今この瞬間、この家族はきっと最高に幸せなのだろうから……。

「コンタクトの調子が悪いのか、視界は悪い。こういうのを「調子が悪い」というのか……。「今日は間が悪い」といつのか？ そして家に帰るのか？

足元ばかりに目をやつていたせいで、何度か人と肩が少しづつかつたが自分にはバランスを崩しながらもコケないようにするのが精一杯だった。感覚的にはゾンビが街を歩いているような、魂が抜け落ちたような意志がない歩くこけしのようだった……。

そうしていりつぱりに駅に到着した。財布がポケットに入つてなかつた。家に忘れたのか。いや、さつき彼女のかばんにいれたばかりだつた。彼女は財布から小銭を券売機にゆっくりと入れるのだつた。どうやら、家には帰してくれないようだ。少しづつ病院と一人の距離はつめられていく。

うつかりは味方してくれなかつた。仮に一度家に帰つたところで意味ないことなど知つてゐるが。唯一、味方してくれたのは天気が快晴とよべるほどよい天氣だつたことだ。こんな日は公園にでも行くのがベストな日だ。今日は気分的には当然、行く気にはならなかつたが……。

電車の中、特に会話もなく一人は立つてゐた。先ほど、最良の友を得たばかりだつたから、朝ほど気分は滅入らなかつた。いつも一人ならドアから外の景色でも眺めている。電車の中から見える景色は好きだ。一定のリズムで流れる景色は誰が意図したわけでもないのに綺麗だ。目に映る全てが瞬間的だつたが、その情景は刹那であるがゆえに綺麗なのだろう。頭の中に入つてくる。

ちょうど乗つてすぐ外を見ると小さなパン屋が視界に飛び込む。高齢のおばあさんが一人で切り盛りしているパン屋。時々、休日になるが、ほとんど毎日開店していた。ただ、今日は休みのようだつた。私は視線に置き場がわからなくなつて何も乗つていらない電車の荷台を見ていた。荷台の鉄は銀のようで少し暗がりがかかつたようだ。今の気持ちと同じなのだろうか？

終始無言だつた彼女に私は立つてゐることが辛くないかそれとなく尋ねてみた。辛くてもどうすることもできないが、仮に妊娠していたなら、辛くてお腹に負担がかかりいつそ流産でもするのか、など意味もなく思つた。彼女は首を横に振り静かにうつむく。

何を考えているのか。気まずい空氣の中、決まって人は相手が何を考えているのか考える。わかるはずのない相手の思考に回廊を重ねつけ、時間が過ぎるのをただ待つばかりである。

私もいま、ちょうどその真つ只中にいる。問題は妊娠が認められた場合である。この時、彼女には一つの選択が求められる。どちらを選ぶのかは恐ろしくて考えたくない。まだ、時期尚早である。しかし、仮に……。そして私にも選択が求められる。そして私は。

電車はほどなく病院のある駅に着いてしまった。休日の駅改札口付近は年齢を問わずに多くの人が入り乱れる。その大半の表情は楽しそうだ。自分のように暗い気分の同類がいないか気になつたが、今居る駅の周辺のような小さな社会にはどうやらいないらしい。

診察の時間にはまだ早かつた。海に近かつたから、少し海が見えるところを歩いた。小さな丘の上で、港が見える丘で、小さな船が流れているのを見つけた。こんな晴れた日には本来ならどんな気持ちで午後の入り江を見ていたのだひつ……。

普段の感覚のはずなのに思い出せない。ただ、今は見ているようで心ここにあらず、といった状況。ただ、頭の中はよくわからない感覚がまわっている。

芝生に座り、じつと遠くを視点が定まらないところへ見てみると、彼女が

「もし、妊娠していたらどうしよう?」少し不安げだった。

当然の質問である。なぜ、昨夜しなかったのが不思議になった。

まだ、どうなつていうかはわからないが、それよりも先に仮定を先行するのは仕方ない。私もさつきから考えていたのはそのことばかりだ。

「どうしようか……」頼りなく私はつぶやいた。

心中はどうしようもない、と私は思っている。まだ、学生の身分で正直、自分に子供を持つという概念が全くなかった。こんな自覚のないような親の子はさぞかし不幸な子になるだろうとも思つてこる。さらに、自分までも大きな負担を得て、幸せになれるとも思えない。二人、いや三人そろつて不幸になるなら一人の犠牲で一人が幸せになつたらいいんじやないか？

今、無理やりに頭の中に構築されているのかもしれない。ただ、本当の本当の腹の中は、おろすことを前提に考えていた。自分の心中を彼女に伝えると傷つくだろうけども、おおよその的を射てることを確信する。それを自分の中で再認識すると少し気分的には楽になつた。後は言葉の表現の仕方だけだと思つ。

そんな頼りない私を見て彼女はさらに続けた。

「私、看護師めざしてゐるでしょ。だから、もし、子どもができた時、簡単におろすのってどうなのかなつて思つの。命を預かる人が」。後半は私の耳に届いてなかつた。

私は彼女が急に恐ろしくなつた。恐ろしくてこの場から逃げ出し、初めてから何もなかつたことにしたいと思つた。

彼女は妊娠をしていたなら産むことを考へてゐるのだ。つい先日までは何も問題はなかつた。何がこうも追い詰めるのだろうか？

私は髪を整え始めた。イライラしたり当惑するとよくとの行動らしい。それよりも、私は彼女を説得しなければならないことを要請されていた。途端にイライラ感が募つてきた。自分の思うようにこじがうまく運ばないからだらう。私の思考の終着点は決まつていて。「うーん、でも、こんな今の二人に子供ができるときつと幸せにはなれないよ。しっかりしたが親があつての子供だと思うけどなあ……」と言つた。その後、彼女はまたうつむいて黙つてしまつた。

おそらく、私に全く覚悟がないのを悟ったのだろう。それ以上はもう何も言わなかつた。私も、現実逃避からか、結果を見る前から気持ちちは逃亡していた。

敵前逃亡は士道不覚悟、とはよくいったものだ。それ以前の問題だと自分自身を嘲笑した。おそらく何回、切腹を命じられるかわかつたもんではない。彼女との意見の相違も自分が変な同情心を出さなければ問題がないことを確信する。

時間が来たので病院へ行つた。よもや今の自分が産婦人科の門をくぐるのとは昨夜まで思つてはいなかつたから当然、緊張はした。だが、そんなことはどうでもよかつた。恐る恐る入り口に入り、待合室のイスに腰掛けた。その場でも終始無言。空気がとても重たかつた。

友は常に私に優しかつたが、ここまで来るとそんな余裕はあまりない。

周りにはお腹を大きくした女性が何人かいた。雑誌を読んでいる。出産を人たちに向けた雑誌だつた。ここは産婦人科。別に読んでいても特に変ではない。ただ、私はこの場から逃げ出したかつた。ここではなかつたらどこでもよかつた。

ほどなく、彼女が診察室に呼ばれた。少しこつちを見たようだつたが、私は目を合わせなかつた。彼女が看護師に案内され、奥へと入つていつた。

今、気がついたが一人になれたのが今日の中ではじめてだつた。少し足を伸ばしてぐつたりとした。緊張と睡眠不足で眠たかつた。頭の中を考えるのも疲れてしまつた。しばらく、ぼーっとしていると、だんだん私の意識はどこかへと飛び立つてしまつた。

深い眠りの中、私は夢を見た。

それははっきりしているようで、あいまいな夢だった。

なぜか、私ひとりで暗い道を歩いていた。わけのわからない道をただひたすら歩いていた。周りは暗くて何も見えない。足元も見えないから左右には歩かなかつた。ただ、ひたすら直線に向かつて歩いた。なにがあるのかはわからない。

ふと、小さな明かりが見えた。私は走つた。すると小さな湖が見えた。池とよんだほうがいいのかもしれない。きれいな水だつた。魚がいてもおかしくないキレイな水だつた。ちょうど山の上流に流れているよな水だつた。

周りを見渡すと暗がりはなくなり、明るい縁一面の世界だつた。
芝生だろづか。

寝込んでみたかった。が、小さな2・3歳くらいの子供　男の子か女の子かはわからない。顔もはつきり見えない。こっちのゆつくりと歩いてきた。おそらくその子は笑っていたのかもしれない。わたしはおそるおそる

「どうからきたの？」と尋ねた。

だが、その子は全く返事をしない。ただ、笑つてゐるだけだつた。私は少し困惑していた。するとその子は近づき、すつと手を差し伸べた。小さな手だつた。視界はあまりよくなかったが、私はその差し伸べられた手をとろづとした。

しかし、急にその手はなくなつた。と、同時にその子も視界から遠ざかつた。どんどん遠くに消えていくようだつた。私はその子を追いたかつたが、なぜか目の前には湖が広がつてゐる。さつきまでは池くらいのサイズだつたのが、数倍の広さになつてゐる。今はよく表情が見えないながらも、どこか悲しげだつた。暗い影のせいだ

るうか？

「おーい、どうしたんだ！」と大きな声。

でも、その子は私とは逆の方向に歩き始めた。その方向には、崖が見える。このまま歩いていれば落ちてしまう。私は何度も大きな声でその子を呼び止めようとした。だが、声は届かない。

ちょうど崖の淵に着いた。そしてこっちに振りむいた。そうするとその子は泣いていた。涙がほほを伝っていた。暗がりの中で流星居ののような滴が流れる。それは幻想的でとてもきれいな涙だった。私の夢はここで終わつた。途中いくつか何かがあつたような気がしたがそれでもないような気がする。起きた瞬間、背筋が湿つていることに気付いた。あぐびでいつも以上に涙腺がゆるむ。

彼女の肩を軽くぱんぱんという音で私は目が覚め、現実へと戻つた。少し眠つただけだつたが、頭は随分すつきりしている。

なぜか体が軽くなつたようだつた。やはり思いつめていたのが、寝不足のせいだつたのか。ただ、現実は寝たところで変わらない。眠りの中に救いはないのだから。

私は体を起こしもう用がなくなつた病院の会計をすませ、後につた。帰りの道中、不安な私を察したのか、彼女はぽつりと妊娠はしていない旨を伝え始めた。どうやら、生理不順どうやつだったらしい。

なるほど、私を不安してくれたやつの正体はそんなよくもわかれのわからないやつだったのか。私はなぜか急に笑いそうになつたが、

それを必死で隠そうとした。この場では笑うのは不適切だ。いや、不謹慎である。

私は一言、一言会話を交わし彼女を駅まで送つていった。最後には体に気をつけるように、と言える余裕があった。彼女も疲れていたのか言葉少なく重い足取りで人ごみの改札を抜けた。ただ、もう身重ではないのだから、足取りの重さはきっと腹から来るものではないことを意識する。

一人で私は今までにないくらいの安心感を得た。私は今日一日の自分の不安が杞憂だったことに馬鹿らしくなった。今日が晴れだつたことをきれいな夕日を見ながら再認識する。少し寝たことも手伝つて、身は軽かつた。今ならジャンプして電車の改札も抜けられそうだつた。

夕日に照らし出された行き交う人がみんな笑顔でいる。目の前に止まつている古くなつたスバルも年季が入つてかっこいい。明日から、夏休みに入るような感覚、いやそれ以上だつた。

もう、叫んでもよいくらいしきつたはずであるが、急に気分が悪くなつた。心臓の下辺りに強烈な痛みを覚えた。視界もまた悪い。

思わず目が痛くなつたのでコンタクトを外そつとした。何がそうさせるのかはわからなかつた。未知の境遇になり急に不安が舞い戻つた。夕日は暗がりがかかり闇へとおちていく。そんな時ふと、さつきの夢を思い出した。さつきの子がだれだつたのか、氣にも留めなかつた。急にいろいろなものがフラッシュバックし始めた。今日一日の自分が何者であったか。卑怯で自分のことしか考えてない自分。氣を使つていてるようで自己満足に満たす自分。彼女がどんな

に不安だったのかをすこしでも考えたか？ 考えても何かしたのか？ 誰かが自分を責め始めた。そんなとき、急に小さな子供が頭をよぎった。

あれは私の子供の幻影なのか……。自然と思考はそこにたどり着いた。

始めから、少しばかりそれを想っていた。が、現実的にそれは棄却された。そのはずだった。それなのに意識だけはなぜか変な方向へと無理やりにひっぱられる。

私の目からは意識とは関係なく涙が出た。これがだれに向かられたものかはわからない。ただ、悲しかった。自分をどうにかしてやりたかった。擦り切れるまでどこかに体をぶつけたかった。どうしたいのかわからなかつた。私が生命倫理をひたすらに力説すればよかつたのか 答えは否。今を捨て必死に頑張ればよかつたのか 答えは否。いつそのままどこかで心中するのがベストかもしれない 答えは否。

私の思考は途方もないところにまで来ていた。よくわからなかつた。ただ、悲しくて自分の無力さ、無知に怒りを通り越してどうすればよいかわからなかつた。だれでもいいからぶつ飛ばして欲しかつた。彼女のことと思うと、もう想えなかつた。人として最低であることを感じ取つた。むしろそういうふうな感情を持つのも罪になる。

今日一日で私は二つの小さな命を失つた。

私はまた、人知れず涙が出た。これはだれに向けられたものか自分の意識にか、彼女にか……。この涙の中の少しが、向けられたほうに伝わればいいと思う。

数日後、私は彼女に別れをつげ、彼女もそれを承諾した……。

(追記)

あれから、随分時間が経つた。今思えば、甘く若かつたかもしない。自分と向き合い、克服しようとしたことで少しは成長できたのかもしない、が、今でもあまり笑ってやり過ごすことはできない。いや、そうしてしまったと自分の弱い部分がまた露呈してしまいそうだから、真摯に受け止めなければ先には進めない。

ただ少しばかり苦い思い出も、時間がたてば、きっとすばらしいものへとなっていく。寒い冬を越え、草木が春になりまた新たな息吹が吹くように、私にもきっと新たな前向きな想いが芽生えるはずである。そして緑が生い茂るような夏のように、自分は成長できるはずだ。

自分にしか余裕がなかつたあのここと違い、少しは他人を思いやれるようになつたのか・・。人の痛みをわかるうと努力しているのか・・。人は誰でも欠けている部分が多い。経験によつて少しでも埋めていこうとすることでき成長することができるのか・・。どんな自分になるのかはわからない。ただ、以前よりはきっと変わつているはずではある・・。心からそう願いたい。

最近、彼女と連絡をとつた。あの件がなければ、もともとウマが合つていたので話は尽きない。なので、彼女とは今でも沈黙以上の良き友である。ただ、お互にあの時の話は一切しない。できないといったほうが適切だらうか……。

向こうには新しい彼氏が出来たとのこと。少し残念だつたけどよ

かつたと思える。時間が経てば周りの様子も少しづつ違つてくる。

私は心中穏やかな気分で日々を送っている。特に不自由もなく不満もない。腹の下のお肉がすこし減つてくれたら、とは思うが、そんなことはどうでもよかつたりする。そんなことが一番の不安なら随分お気楽な人間だ。彼女とのことは、はじめは少し複雑だったが、時間がお互いを癒してくれたようだ。逆に今は割りと刺激が少ないくらいだ。焦ることでも喉もとを過ぎれば熱さを忘れるように、あのこのような不安な感じにはならない。思い出したところで感情の拌躑まではできないようだ。

今は毎日学校で友達に会い他愛もない会話をする。そして一日が過ぎる。悠久の時間ではないけど、今を大切にしたい。

また、あれから時間が経つた。少し前にメールが来た。久しぶりだつた。彼女からの連絡で近々、結婚すること。少し私は驚いたが、素直に喜んだ。

もしかしたら悲しかつたのかもしれない。この感情はどこから沸き起つるものかわからないけど、きっと負の感情ではあってほしくない。あのころの私とは違い、髪も黒くなり少しは大人になつただろうか……。背広もくたびれるくらいに着こなしている。言葉遣いも丁寧になつた。

ちょうどそのころ、携帯電話を新規に契約した。深い意味はなかったが、彼女には新しい連絡先は教えなかつた。住んでいるところも引っ越し、もう、お互にわからない。以前住んでいたアパートは壊され、別の施設が建設され始めている。好きだった大きな木も切り倒された。時間はゆっくりとでも確実に進んでいく。過去の思い出の場所も知らず知らずのうちに消されていく。いつまでも変わ

らないものはそのときの感情だろうか。ただ、その感情ですら、希薄になつてゐるような気がする。必死にあがらつてはみるもの、時間は経てばまた少しづつ消されていく。

最近はもう、彼女のことを思い出すことは少なくなつた。社会に出て、日々の喧騒に巻き込まれて、いろいろな刺激が私の意識を無理やりむけさせる。アドレスのデータもほとんど使わない人ばかりになる。週末ばかりが気になつて、今もそんな話題が飛び交つてゐる。ただ、オフィスビルをすり抜けて今日も一日が終わり、そして、クーベタイプの疲れたシートに座つてカーステレオから流れる歌に耳を傾ける。少し時代遅れの切ないラブソング。そんな折にふつと思ひ出す。貴重な記憶を。すでに、だいぶん、かすれた筆で水に近い絵の具の色を書くようになつてはいるけども……。

もう、あまり顔も正確には思い出せない。時の流れは残酷なかもしれない。時間は辛かった心を癒してくれるが、その代償に記憶や感情をさらつていく。

懐かしくても会えずに、どこにいるかもわからない。偶然、街でそれ違つても気づかずにお互いの道を目指してゐる。そんなこのくり返しが人生だと思うと少し悲しかつた。おそらくこの人生の終着点は自分が生きているうちには訪れないのだろうとも思う。

月日が流れ、少しづつ遠ざかる夢のかけら。誰かと暮らしていくかも。知らずに何かを忘れていく……。

(了)

(後書き)

表現等未熟な点が多く、また結局何が言いたかったのかがわからぬ小説だと思いました。これは少し昔に書いたもので少し手を加えて掲載してみましたがいかがでしたでしょうか？ 次回はより意義深いテーマで物語を書いていこうと思いますのでよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4217a/>

Time

2010年10月25日19時25分発行